

「ただ野球だけは…」

球道夢限

スポーツかごんまNEWS

スポーツ

号外

春の九州高校野球鹿児島県予選第5日(3月28日)、鴨池市民球場の第1試合に第2シードの神村学園が登場した。

春の初戦は、どのチームにとっても約半年ぶりの公式戦、しかもその年一番最初という特別な意味を持つ。今年の神村学園にとってはさらに格別な意味があったことだろう。3月の始めに長澤宏行監督が突然退職し、しかもそのことが大会直前に新聞に書きたてられた。部員や山本常夫現監督らスタッフにとっても寝耳に水の話だったという。大黒柱を失って、本当に野球ができるのかどうか、きょうはいろんな意味でしんどかった」と試合後、山本監督は心情を吐露する。指導者を失った動揺、周囲からの心ない誹謗中傷、人間関係に対する疑心暗鬼…あえて詳しくは聞かなかったが、野球以外の大きな雑音に振り回されていたことは想像に難くない。僕がもし同じ立場にいたら、動揺しまくって野球どころではないだろう。この日は彼らがどんな野球をするのか、見届けて球場に足を運んだ。

圧巻だったのは三回の永石。鶴田都貴のバットテリーである。スアは神村の1-0。一死から初安打を許し、バントで送られ、一死一塁と得点圏に走者を背負った。それまで軽快なテンスで投げていた永石は、カんで次の二番打者に対してボールが高めに浮き、簡単に3ボールとしてしまう。ここで鶴田は次のボールを間もおかず外して、空いている一塁にあっさり歩かせた。

ある意味、セオリー無視である。リードしているとはいえ、点差はわずかに1点。次打者以降は相手の中軸を迎える。歩かせた一塁走者は逆転の走者にもなりかねない。本来ならカウント0-3からでも、間をいたりフォームを修正したりして、二番打者で勝負するのが常道だろう。だが、神村バッテリーはあえて三番打者との勝負に出た。最初の一塁けん制は一塁手との呼吸が合わずにボールをそらしたが、相手の一走が進塁せず、大事に至らなかった。これでようやく永石も落ち着きを取り戻し、三番打者をきっちり空振り三振に仕留めてピンチを脱した。四回以降は再びテンス良く投げ続け、相手打線につけ入るスキを与えなかった。僕は走者を出すとむきになってしまふことがある。鶴田がつまくりードしてくれました(永石)。長いとバッテリーを組んでいるので、あの場面は外して三番勝負」とアイコンタクトできていました(鶴田)。

苦しいチーム状況の中で彼らを支えたのは「(長澤)監督のために結果を残そう」「山本監督」という強い思いだった。僕らは野球をやるために神村に入った。いろいろ大変だけど、気持ちを持ち替えて、ただ野球だけは真剣にやろうとキャプテンを中心にみんなで話し合った」と鶴田は力強く語る。逆境さえも力に変え、結果を残したいという私学野球の執念を僕はそこに見た。

